読売歌壇

小池　光　選

よし今日も行くぞと一声気合い入れ夜の散歩に九十の出陣　横浜市　芳垣　光勇

【評】炎天下の昼間は散歩できない。それで夜歩く。夜は疲れて出るのが辛い。それでも出てゆく。気合入れて、さあ九十歳の出陣だ。評者も、毎晩同じことをしている。

空の青と雲の白こそ夏なのだそを病室の窓に教はる　東京都　浅倉　修

【評】入院中の病室の窓から空が見える。真っ青な夏の空、そして純白の雲。つくづく夏だとおもう。入院生活を送るまで、こんなことも知らなかったのだ。

自販機がひたすらそこに立ちつくす雨ニモマケズ風ニモマケズ　守口市　小杉なんぎん

【評】日本中にものすごい数の自販機が立っている。ひとことの文句も言わずに立っている。宮沢賢治が見たならなんと思うだろう。

夜空裂き笑顔あふるるビッグスロー北口榛花ブダペストに咲く　対馬市　神宮　斉之

頻尿に苦労したとのエピソードありて茂吉も親しかりけり　東京都　野上　卓

おまんじゅうおいしそうだな和菓子屋の前を通って海を見に行く　鳴門市　楠井　花乃

さりげなく若いナースが声かける「雨、止みましたよ」手術日前夜　久留米市　緒方　英精

十五年暮らせば言葉分るらし「抱っこ」と言えば猫膝に乗る　姫路市　鎌田多恵子

世界地図にカーボベルデを捜したよ　小さい島の大きな選手　千葉市　福岡　初代

「最終面接今日も落ちた」といふ吾娘の眠れる頭そっと撫でやる　横浜市　古山　智子

栗木　京子　選

消しゴムのカスを残して孫帰る今度いつ来るまた来て四角　高松市　好井喜久代

【評】祖父母の家で字や絵を書いて過ごした孫。消しゴムでなく、そのカスを残したところに臨場感が漂う。「さよなら三角また来て四角」を生かした結句も味わい深い。

先を読むカメラの動き鮮やかに寄りと引きとでスリーポイント　横浜市　杉山　太郎

【評】バスケットボール。コート上のスリーポイントラインの外側から選手たちは長いシュートを見事に決める。試合の撮影者の動きに着目したことで個性的な歌になった。

猛暑日に汗をかきかきスーパーへさんま梨くり秋がもてなす　羽曳野市　浅田真由美

【評】食品売り場には一足先に秋の味覚が並んでおり、猛暑で疲れた心身を癒やしてくれる。「秋がもてなす」という表現が秀逸。

雲を読み風を数えて待ちにけり生きがいと言うもののくるのを　東京都　田中　隆

新涼に自転車の子のヘルメット続くママのも揃いのピンク　つくばみらい市　三ツ矢タヱ

久々にページを繰りし文庫本活字小さく降参したり　東京都　市川せいじ

体育でみんな出はらう教室にだれかを探している扇風機　仙台市　荒井はるか

夕暮れに飛び交う土手の赤トンボ犬の背に乗り羽を休める　豊後高田市　藤延　秀則

手を打てば口開けて寄る濠の鯉夏の終わりの淋しさを呑む　たつの市　七條　章子

作文を苦手な少女が八十路にて短歌詠むとはおかしかりけり　八戸市　鈴木　洋子

俳　万智　選

夕暮れの御祭り広場に集う人誰もが夏の真ん中にいる　仙台市　小野寺寿子

【評】御祭り広場に集まった人たちを、かたまりではなく一人一人としてとらえたところが魅力だ。「真ん中」という語には、今という時間と、ここという場所の両方が響いている。

追熟をゆるされた果実のようにふたりは睡る常温の部屋　横浜市　紺屋　小町

【評】全体のエロティックな味わいを支えて光るのは、クーラーをつけていない部屋を「常温」とした表現だ。人工ではなく自然の空気の中で熟すふたりである。

街なかに混声合唱ひびく夏男性用の日傘が増えて　東京都　武藤　義哉

【評】女性の日傘と男性の日傘が、ハーモニーを奏でる夏。上の句が比喩であることが、下の句でわかるところが面白い。

向日葵は永久機関また次の夏に向かって回す歯車　千葉市　小金森まき

島のひとつひとつに名前がついていて昔のひとの見立てが強い　川崎市　からすまぁ

無花果が今朝は五つもとれしことスマホを持たぬ母への葉書　松江市　犬山　純子

目標は寝ることだった熱帯夜途絶えて秋のもの思ふ夜　静岡市　柴田　和彦

おやすみのLINEののちも起きてゐてちひさくきみを裏切りてをり　八王子市　土屋ひろ菜

街灯に引き寄せられる蛾のように僕らはスマホを開いてしまう　八王子市　鈴鹿　直之

花束がほどけたようにそれぞれが一輪となる秋の放課後　朝霞市　桐島　あお

黒瀬　珂瀾　選

にぎやかなデイより帰り寂しさを追い払うべく空気入れ替う　大阪市　黒田　道子

【評】デイサービスには仲間が沢山いるけれど自宅はひとり。そんな寂しさを気力で追い払う、高齢者の一つの生き方を表した一首。

二の舞を踏んではならぬ人生に獄が教へん無碍なる道を　大分市　長畑　孝典

【評】先任の岡野弘彦先生の頃から獄中歌を投稿してきた作者が、出所とのことで最後の歌を送ってこられた。罪を犯すことの愚かさ、取り返しのつかなさを我ら読者に伝える歌の数々。罪と謝罪に向き合う生を思います。

こだわって稲架掛けをする若者はネット駆使するIターン組　白井市　毘舎利道弘

【評】今や農業にもIT革命が及び、新時代の試みが広がる。でも稲架掛けのような手作業にもこだわる、新世代の横顔が頼もしい。

ゆきあひの夕空に浮く雲三片コロナまだまだ終息ならず　伊勢原市　山田ゆたか

死に抗うことの虚しさそこはかとなく夏の終りの「おわら風の盆」　横浜市　森　秀人

この道を踏み行く命あと五年与え下されスーパームーン　日立市　佐川　ヒサ

死なれんと嘆ける祖父の金継ぎの椀に軟飯輝いており　金沢市　塩本　抄

四年振りのデカンショ節なり浴衣着てブルカの人と港で踊る　神戸市　北野　中子

芸の無き自称芸人多き世に上岡龍太郎静かに逝けり　吉野川市　喜島　成幸

後の世に祈りばかりを語り継ぐそれ先人の願いにあらず　草加市　飛田　一三

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はくるみわり